

ジークムント・フロイト／マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について（五）

—— 精神分析の胎動 ——

金 関 猛

フロイトとダーン『オーディンの慰め』

フロイトは「本の虫」⁽¹⁾であった。医学生となつてからは専門書を買ひあさっていた。「大学に入ると、ただもう夢中になつて本を収集し自分のものにするようになった」⁽²⁾という。フロイトにとって、書籍が研究のために欠かせないの言うまでもない。さらに、知識を得て教養を身につけるための媒介であり、あるいはまた、気分転換と娯楽の糧でもあった。しかし、それにはとどまらない。フロイトは物としての本に惹きつけられていた。『夢解釈』における自己分析では、自分の「書籍愛好」⁽³⁾には次のような出来事がかかわっているという。

私の父が、あるとき、遊び半分に、私と私のすぐ下の妹に色つきの図版の入った本（ベルシャの旅行記）を渡し、その本を破つてしまへと言つた。それは教育上、あまり好ましいことではなかった。私は当時五歳で、妹は三歳にもなつていなかった。私たち子どもが大はしゃぎでこの本を「中略」むしりとりつていく光景は、人生のこの時期で具象的な想い出として残っているほとんど唯一の光景である。⁽⁴⁾

教養と文化の源泉として書物が一般に呪物として崇められていた時代である。突如、禁令が解かれ、聖なる書物を破つてよいということになったのだから、子どもたちは有頂天になったにちがいない。父にどんな考えがあつたのかはわからない。おそらく、深い思慮もなく、子どもたちに何か羽目を外すようなことをさせてみたかつたのだろう。兄と妹は「大はしゃぎ」だった。しかし、「書物愛好」の源にそうした破壊の喜びがあつたというのは奇妙なことだ。フロイトにおいては、書物による人間形成（Bildung）の始まりに本の破壊という蛮行があつた。

少なくともフロイトにおいて、知性はある面で破壊的である。全体として把握された夢、想い出、空想を分解し、断片化することにフロイトの知性は向けられる。分析—Analyse—が意味するのは、そもそもばらばらにすること、解体することだ。全体を一として受けとめれば、知性は停止する。フロイトは人の心に分析のメスを入れる。分析へと向かうフロイトの知性は破壊衝動と結びついていた。おそらく知性は一般に破壊的な性格を帯びるのだろう。こうした問題について、フロ

イトは一九二〇年の『快原理の彼岸』で「死の衝動」という観念を導入することさらに考察を深めることになる。それはともあれ、もちろんフロイトの用いた分析のメスは、まさに読書から得られた知識や教養によって磨きがかけられていた。フロイトにとって読書が教養の糧であり、専門的研究の基盤であり、また気晴らしでもあったことは疑いを容れない。

『婚約書簡』では、書物にまつわる話題が頻繁に現れる。二人の手紙ではゲーテ、シラー、ハイネ、シェークスピア、ディケンズ、セルバテスといった世界の大作家たちについて語られる。また、ハイゼやフライタークなど、今日ではもはやあまり話題にはならない作家についても書きつけられている。フロイトはマルタの知的教育に気を配っていて、「僕はずっと君のための読み物を探しています」(Ba.2.S.102)と書いている(一八八三年八月五日付)。この日の手紙によると、自分では思いつかないので、ブロイアーに尋ねたところ、メリメ、ジョージ・エリオット、ゴットフリート・ケラーを勧められたという。これは、婚約してから一年以上経って書かれた手紙である。もちろん、読書について書かれているのはこれがはじめてではない。フロイトは婚約の二日後にもうマルタに一冊の本を贈っている。それはフェーリクス・ダーン(一八三四年―一九一二年)の『オーディンの慰め』(初版一八八〇年)だった。これはその日にハンブルクへ旅立つマルタに贈られたのである。本稿ではおもにこの小説について論じることとする。

一、フロイトと『オーディンの慰め』

フロイトが最初にマルタに贈った本には次のようなメッセージを英語で記した名刺が添えられていた。

いとしい婚約者マルタにこの本を最初の別れの日に贈ります。

一八八二年六月一九日

自らの秘密を漏らす恋人より。(Ba.1.S.90)

この本はマルタの知的教育のために贈られたのではない。フロイトは、この本を通じて「自らの秘密」を打ち明けようとしたのである。それがどんな「秘密(secret)」であったのかについてはこれ以降の手紙でも何も語られていない。三日後、マルタは、読書の時間はまだとれないとヴァンツベークから書き送る(八二年六月二二日付)。そのうちフロイトは「君がオーディンの慰めについてどう考えているか、書いてくれませんか」(Ba.1.S.115)と頼むのだが(八二年六月二六日付)、これについてのマルタからの返答はない。それから半年以上経って、フロイトは「秘密年代記」と題した手帳―フロイトとマルタとで交わされた一種の交換日記(『婚約書簡』第一巻所収)―に次のように書きつける(一八八三年一月三一日付)。

オーディンの慰めを得んとして、僕は不屈の反逆をしながらまずは君と戦い、そのちに君とともに戦うつもりです。(Ba.1.S.532) 激しい表現だが、これだけでは何を言わんとするのかはよくわからない。「オーディンの慰め」と書かれる部分に引用符はなく、作者の名前もない。直接的に小説のことを話題にしようとしているのではないが、もちろんダーンを念頭に置いて書いているのは明らかだ。やはり、

そうとうにこの小説にはこだわりがあったと考えねばならない。だが、これ以降、ダーンの『オーディンの慰め』が二人の文通のなかで話題になることはなかった。それだけに、その本に自分のシークレットが隠されているとまで書くのは謎めいている。

結婚後の一八八七年にフリースとの文通が始まるが、そのフリース宛に書き送られた二八七通の書簡にダーンの名前はない。『フロイト全集 (GW)』にもその名は見いだせない。また、ジョーンズをはじめとするフロイト伝の執筆者もダーンには言及しておらず、また、フロイトとダーンの関係を論じる論文も見当たらない。詳細な注を付す『婚約書簡』の編者も、フロイトの言う「秘密」については、「古代の（ユダヤ教の）信仰」⁽⁵⁾がかかわっているのかもしれないと推測するのみで、その論拠もあげていない。ともあれ、自分の「秘密」が隠されていると書いて、「別れの日」にその小説を恋人にプレゼントするのだから、その本には深い思いが込められていたにちがいない。さらに、今述べたとおり『全集 (GW)』にダーンの名はないのだが、『夢解釈』の「革命の夢」の分析で、作者の名は挙げずに、また引用符もつけずに「オーディンの慰め」⁽⁶⁾（強調はフロイトによる）という表現が現れる。夢の分析のなかで、ふとその言葉が連想されたのである。『オーディンの慰め』はフロイトの無意識にもかかわっていた。「革命の夢」についてはのちに論じることとし、フロイトの無意識ともかわるその「秘密」を解き明かすために、次に作者ダーンについて述べることにする。

二、ダーン

ダーンはドイツ文学史で大きく取り上げられる作家ではない。ドイツ文学者マルティニーニ（一九〇九年～一九九一年）の浩瀚な著作『ドイツ文学史』において、ダーンに関する記述は次の数行にとどまる。

いわゆる「学者作家ロマーン」「長編小説」のタイプを代表しているのは法制史家フェーリクス・ダーン (Felix Dahn) で、彼は歴史についてのその知識と研究に基づいてロマーンを作った（『ローマ戦争戦』Ein Kampf um Rom 一八七六、『オーディンの慰め』Odins Trost 一八八〇）。⁽⁷⁾

日本の独文学者によるドイツ文学史では、たとえば藤本淳雄他の『ドイツ文学史』においてダーンは「ゲルマン民族の過去に取材した大規模な歴史小説」⁽⁸⁾を書いた作家として、また、一八七〇年代に流行した「史劇」⁽⁹⁾作家の一人として紹介されるにとどまる。また、ダーンの小説の日本語訳もなく、日本ではほとんど知られていない作家と言ってよいだろう。ただし、ダーンの活動範囲はひじょうに広く、詩も書いており、それがリヒャルト・シュトラウスなどの楽曲の歌詞となっているので、そうした面では日本でも知られているかもしれない。

ダーンは一八三四年にハンブルクで生まれ、その後ミュンヘンで育った。父母ともに有名な俳優で、ダーンは子どもの頃から演劇に親しんでいた。それとともに歴史に熱中し、一八九五年出版の四巻本の自伝『回想』によれば、「八歳」のときにベッカー（一七七七年～一八〇六年）の一四巻本の世界史を読破し、その後も繰り返し読み返したという。⁽¹⁰⁾ 読んだばかりではなく、その本に登場する人物になりき

り、その場面を思い描くという空想に耽っていた。⁽¹¹⁾ こうした体験のちの創作活動の源泉となったにちがいない。弟ルートヴィヒは俳優となったが、ダーンはミュンヘン大学に進学し、哲学と法学を専攻した。そののちベルリン大学―現在のフンボルト大学―でさらに勉学を続けるとともに、文学者サークルに出入りするようになった。詩作には大学入学以前からずっと打ち込んでいた。しかし、作家として身を立てようとはせず、大学で研究者となる道を選んだ。一八六三年にヴュルツブルク大学法学部の教授に就任したのち、ケーニヒスベルク大学、ブレスラウ大学で教授を歴任した。そのかたわら精力的に創作活動にもたずさわっていた。存命中その作品は人気を博していたように、一八九八年には全二一巻の著作集が出版されている。

もっとも成功したのは一八七六年出版の『ローマ争奪戦』で、これはその当時の「爆発的人気小説」⁽¹²⁾だった。この小説の「序言」で、ダーンは、これが「学問的基盤」⁽¹³⁾の上に成り立つ作品であるとし、その基盤をなす学術書として自著を列記している。またそれに続いて、「ローマの英雄ケテグス・セサリウスの物語は完全に自由創作されたものである」⁽¹⁴⁾と書く。これは、幼年期に培った空想力と学者としての知識が結合して生まれた小説であり、まさに「学者作家ロマン」であった。二〇一四年出版の新版で一頁に及ぶ大作である。物語は「西暦五二七年の夏の夜」の「ラヴェンナ」⁽¹⁵⁾を舞台として始まる。その当時、イタリア半島を支配していたのは東ゴート王国であった。小説で語られるのは、この王国のゴート人とローマ人の戦い、そして王国の滅亡をめぐる物語である。

これがベストセラーとなった一つの要因は、起伏に富んだ波瀾万丈の物語が読みやすい文体で書かれているところにあるだろう。この小説はユダヤ系ドイツ人の映画監督ジオトマク（一九〇〇年―一九七三年）によって映画化されている。これは、第一部、第二部からなるスペクタクル巨編で、第一部が一九六八年、第二部が翌年公開された。評価は芳しくない。もちろん映画の評価と原作とはかわりはないが、そうした映画のシナリオに素材を提供しうる小説であった。さらにこれがベストセラーとなった背景には出版当時の社会的、歴史的な状況があった。つまり、出版されたのはドイツ帝国成立（一八七一年）ののち、ドイツ人の民族意識が高まり、愛国感情が沸き上がった時代だったのである。それは、ビスマルクによる文化闘争、反カトリック政策の時期でもあった。そのなかで、ローマ人と英雄的に戦うゴート人―ゲルマン人―の物語に人々は熱狂したのである。

旧東ドイツドイツ民主共和国のドイツ文学者ゲールツは、ダーンが「帝国主義的国粹主義精神の文学における代表者であった」⁽¹⁶⁾と位置づける。そして、『ローマ争奪戦』について次のように述べる。

この作品で、かれは「ゲルマン魂」に対する青年の熱狂をよび起こし、「ドイツ」帝国の反動的道德理論の正しさを弁護しようとしたのである。この作品ですでに有害な役割を演じはじめていた、ゲルマン人種の優越という決まり文句は、最終的には、従者の忠誠や死の覚悟という概念の煙幕に包まれて、ナチ・イデオログの歴史観となり、同時にドイツの民衆を悲運へと導く結果となった。⁽¹⁷⁾

もちろん、ダーンに国民社会主義を招来しようという意図があったはずはない。また、その読者も極端な人種主義に熱狂したわけではないだろう。しかし、そうであるにしても、『ローマ争奪戦』は英雄的なゲルマン人が活躍する小説だった。そうした作家の小説にユダヤ人フロイトの「秘密」が隠されているというのは奇妙なことだ。

『オーデインの慰め』は、北欧神話の最高神で、ゲルマンの神々の父オーデインをめぐる物語である。フロイトにとって、ゲルマンの神話は、ユダヤ人であるからというばかりではなく、ウィーン人としても縁遠いものであったはずだ。先述のとおり、プロイセン人ノットナーゲル教授に感じた違和感を、フロイトは「ゲルマンの森の人」(B&L S.367)と表現するほどなのである。他方、別離の日に婚約者にプレゼントするのだから、この本にはよほどの思い入れが込められていたにちがいない。また、本人がそう書くのだから、この小説にはフロイトの「秘密」が隠されていたと考えねばならない。さらにこの小説について考察する。

三、ダーン『オーデインの慰め』

① 異教の語り手

初版が一八八〇年に出版された『オーデインの慰め』は、一九〇一年に第一〇版が出ており、それなりに読まれていた本であった。しかし、常識的に考えて年若い女性に贈るような本ではない。語り口は重々しく、その内容も甘美な感傷をかき立てるようなものではない。小説は、オーデインをめぐる神話と、その神話を物語る男の状況が交錯すると

いう構成をとる。語り手の男が生きているのは一一世紀のアイスランドである。本の扉にはモットーとして、

私の知るとおり、数少ない者のみが
慰められる――

オーデインの英雄的で勇敢な慰めによって⁽¹⁹⁾

という言葉が掲げられる。実際、ここで語られるのは「英雄的で勇敢な」物語で――一九世紀末の――女性向けの本ではない。少なくとも到底マルタの好みに合うとは思えない。贈られた本を開きはしただろうが、読もうという気は起こらなかったのではないか。まず、読み通すことはなかっただろう。それだけに、なぜこうした本をフロイトが婚約者にプレゼントしたのかは謎として残る。

小説の冒頭で語り手トルゲイルは次のように言う。

私は重い罰を受けるだろう。司教イスレイブから祈りと懺悔を強いられて。司教の辛辣な息子にして扇動者ギツルはもつときびしく罰するだろう。もし二人が、夜のあいだに私がここで何を記しているかを知ったなら。⁽²⁰⁾

歴史上、アイスランドでキリスト教への改宗が始まったのは一一世紀初頭だった。イスレイブもギツルもその当時に実在したカトリック司教である。そして、トルゲイルはカトリックの圧迫を受け、その「罰」を恐れながら、オーデインの神話を語り出す。伝承の物語を息子に伝えようと、夜中に密かにそれを書き綴るのである。そして、物語の途中でこう述懐する。

しかし、私は何と言ってもスカルドではない。私はスカルドとし

ての技芸なしにただお前のために書くのだ、いとしき我が息子よ。⁽²¹⁾

自分にはスカルド（吟唱詩人）のように美しく語ることはできないというのだが、これは作者ダーンの言い訳のようにも聞こえる。語られる物語はさっぱり美しくない。主語を先頭に置かない倒置文が不自然に連続し、仰々しい文ばかりが延々と続くのである。これは『ローマ争奪戦』のような読みやすい文体で書かれた大衆小説ではない。かといって神秘的で詩的な雰囲気醸し出されるわけでもない。ダーンは、自伝『回想』の最終頁で、所詮、自分は「三流文芸作家」⁽²²⁾でしかなかったと告白する。どうも『オーデインの慰め』はそうした作家の作品と評価するほかなさそうだ。そうであるならば、なおさらフロイトのこの小説への思い入れは不可解である。

フロイトがこの小説に惹かれた理由としてまず考えられるのは、語り手の置かれたアイスランドの状況である。露見すれば、カトリックの司教に罰せられることは承知のうえで、男は伝えられたオーデインの物語をひそかに書き記す。フロイトはこうした状況を、ウィーンにおける自分の立場に重ね合わせることができただろう。フロイトには、カトリックに圧迫される少数派のユダヤ人という自己認識があった。『夢解釈』ではローマへの憧憬と敵意が語られる。ローマは文化の中心であり、憧れの街であるとともに、カトリックの総本山でもあるその街はフロイトにとっては敵地でもあった。『夢解釈』では、少年時代のことを想起し、「ポエニ戦争をめぐる私の共感、ローマ人ではなく、カルタゴ人のほうに向けられた」⁽²³⁾と書く。カルタゴ人ハンニバルが少年フロイトの英雄であった。

ハンニバルとローマは少年の私にとって、ユダヤの粘り強さとカトリック教会の組織力の対立を象徴していた。⁽²⁴⁾

カルタゴとユダヤとは直接的には結びつかない。しかし、フロイトにとって、同じ「セム人」としてハンニバルはユダヤの側にあった。『オーデインの慰め』の語り手は、キリスト教が布教されるなかで、なおも伝承されたゲルマンの神話を語り継ぐとする男である。男はユダヤ人とは何の縁もない。しかし、多数派を占めるローマ・カトリックに對する少数派として、フロイトはその男の状況に共感を覚えたにちがいない。やがてゲルマン至上主義者が多数派となり、フロイトを含めたユダヤ人を徹底的に迫害したという歴史的な経緯を考えれば皮肉なことだ。しかし、一九世紀末にそうしたことを予見した者はいなかった。こうした語り手の状況は、この小説において副次的な要素でしかない。確かに、その状況に共感を感じて読み始めはしたのだろうが、しかし、フロイトの「秘密」がそこに隠されているとは考えられない。それを見いだすには、語られた内容を探らねばならない。

② オーデインの神話とオイディプス

トルゲイルの語る物語にはオーデインをはじめとして、バルドルやトールといった男神、運命の三女神ノルネン等々が登場し、また、半神ロキが大きな役割を演じる。さらに、世界の終末（ラグナロク）の物語も取り入れられており、その面ではエッダの伝承に基づいている。しかし、逸脱するところのほうが大きく、ダーンの自由な創作という性格が強い。トルゲイルは、自分の「父が歌った」⁽²⁵⁾内容を物語るの

だという。そして、この語り手が聞き覚えたなかでは、「オーデインの慰め」の伝承が必ずしも「もつとも美しい」わけではないが、それが「至高」の言い伝えなのだという。その物語では「全父 (Allvater)」²⁶ という語が幾度も繰り返され、すべての神々にとってオーデインが父として君臨することが強調されている。オーデインは不死なる神々の父である。

物語は神族アースと巨人族の争いから始まる。諍いのもと人間である。人間を創造した神々は人間を庇護する。それに対し、巨人族にとって、人間は自然を破壊し、自らの領分を侵す邪悪な存在であり、その抹殺を欲する。巨人たちは、ロキの陰謀に乗って、雷神トールの槌ミョルニルを奪い、また女神フレイアを誘拐する。そして、返してほしければ、人間を殲滅せよと神族に迫る。両者は全面戦争の瀬戸際にある。そのときオーデインが妥協案を提示する。今後、神族は人間がどんな苦境にあらうとも、その営みにいっさい手出しはしない、そう約束するのでフレイアとミョルニルを返せ、というのである。巨人族はそれを受け入れ、和平が成立する。ところが、そのあとすぐにロキがまたも狡猾に立ち回り、争いを再燃させようとする。ロキはオーデインの息子なのだが、その出生には秘密が隠されている。そして、父の権力を我がものとしようという思いがつた野望を抱く。そのために奸計をめぐらして混乱を惹き起こし、それに乗じて権力を奪おうとするのである。ロキは人間界に嫉妬に起因する争いを生じさせる。ことは思惑どおりに運ぶ。神々の寵児ハラルド王がヒルデを妻に得たことを妬むスカジ王はロキに焚きつけられ、ハラルドを襲う。しかし、逆にハ

ラルドに殺されてしまう。そのとき、人間に変装したロキはハラルド王に刃を突き立てようとする。それに気づいたトールはロキに向かって槌を投げつける。間一髪でハラルドは救われる。しかし、人間界に神の介入があったと憤激する巨人族は協定が破棄されたと見なし、武器を取って立ち上がる。戦いは神々の圧倒的な勝利に終わる。多くの巨人が死に、生き残った者は戦場を逃れて身を隠す。またも平和が取り戻されたかに見える。しかし、ロキはあきらめない。オーデインの愛息バルドルの急所がうなじにあることを聞き出したロキは、そこを槍で刺し貫く。バルドルは父を同じくするロキの――ロキの主張によれば、自分が年上なので――弟である。急所を刺されたとはいえ、不死とされる神は、ただちには死なない。傷ついたバルドルは母フリッグの膝に抱かれて横たわる。そして、瀕死の息子を前にした父オーデインと、捕らえられ縛められたロキの対話がこの小説の一つの山場となる。

ロキはオーデインに「なぜこんな所業に及んだのか」と問われ、こう答える。

なぜかというのか。言ってやろう。あなたへの愛ゆえだ。²⁸

神々からは悲鳴が上がリ、オーデインはたじろいで、一歩退く。ロキはさらにこう続ける。

そうだ、あなたへの愛、炎のような愛ゆえだ！あるいは、同じことだが、こう言い換えてもよい。あの金髪頭「バルドル」への嫉妬ゆえだ。²⁹

太陽の馬車を駆るバルドルはオーデインの寵愛を受ける嫡子であり、長男である。それに対して、早く生まれたとはいえ、ロキの母は女神で

はなく、結婚によって生まれたのでもなかった。オーディンが犯した巨人族の女から生まれたのが、ロキであった。ロキは自ら「私生児」⁽³³⁾を名乗る。ロキが語るところによれば、手籠めにされたにもかかわらず、ロキの母ラウフェイアはオーディンを愛していた。しかし、オーディンは二度とその女のもとを訪れることはなかった。ラウフェイアはロキが生まれると、赤子を背負い、オーディンに会おうと神の国に赴く。しかし、オーディンにまみえることはできない。ちょうどそれはオーディンとフリッグのあいだにバルドルが生まれた日だったのである。ラウフェイアは絶望するが、息子の目が「オーディンの灰色の目」⁽³⁴⁾にそっくりなのに気づき、子どもを育てることにする。やがて寿命が尽きたとき、ラウフェイアはこう叫ぶ。

オーディン、オーディン、あなたの息子連れて行つて！私の声を聞いて、オーディン！⁽³⁵⁾

その声は天上界に響き渡り、オーディンにまで届く。遣わされた霊鳥の鷲がロキをオーディンのもとにもたらし、それ以降、ロキはヴァルハラで神として育てられる。しかし、ロキは満足しない。父が「愛を与えてくれなかった」⁽³⁶⁾からだ。オーディンの隣には「先に生まれた自分を差し置いて」、バルドルがすわり、ロキにあてがわれるのは「二番目」⁽³⁷⁾の席でしかなかった。オーディンは最愛の母を捨てた男でもある。ロキは自分を愛そうとしない父を憎み、その愛息に嫉妬する。龍児の殺害を企てるのは妬みゆえばかりではなく、そのことによって父への恨みを晴らすうとするからだ。父に「なぜこのわしをあやめようとはしなかったのか」と問われ、ロキはこう答える。

あなたを愛しているからだ、父よ！「中略」あなたを憎むよりももっとずっと熱く愛しているのだ。「中略」俺はあなたの長男ではないか！⁽³⁸⁾

父を憎むのだが、同時に父を愛するがゆえに父を殺すことはできず、その愛息を殺害することで、父への憎悪を満足させようとしたのである。それはまた、愛する母のための復讐でもあった。この小説では一般には秘匿される近親者へのアンビヴァレンツがあまりにも露骨に表現されている。右で引用した言葉も、ハラルド王殺害未遂を断罪するオーディンに向かってすでにロキが言ったことの繰り返しなのである（「あなたを愛しているのだーあなたを憎むよりもずっと愛しているのだーあなたなしに俺はありえない」⁽³⁹⁾）。小説では、こうした息子と父の関係、父への愛憎のアンビヴァレンツが前面に押し出されている。しかし、息子と母親の関係について語られる箇所もある。まだ元気だったバルドルとの語らいのなかでオーディンは言う。

わしの見るところ、男児は父よりは母に愛着するものだ。そして、たぶんそれはそれでよい。息子により大きな痛みと愛を与えるのは、父よりはたいてい母のほうなのだ。そして、それは男児が最初に――女に向ける愛でもある。⁽⁴⁰⁾

ダーンはフロイトの『夢解釈』を先取りするかのようだ。ソフォークレスの『オイディプス王』を論じるフロイトはこう述べる。

最初の性的興奮を母親に、最初の憎悪と暴力的な欲望を父親に向けることが、もしかすると私たちすべての宿命であるのかもしれない。⁽⁴¹⁾

フロイトが言うのはもちろん男児のことだ。その母への性的な愛着、抑圧された父への憎悪が夢を解き明かす鍵である。「憎悪と暴力的な欲望を父親に向け」ながら、それが一般に行爲にまで至らないのは、ロキの言うように、父を「憎むよりもっとずっと熱く愛している」からだ。ダーンの小説で言われる「男児が最初に―女に向ける愛」という言葉を、母親への「最初の性的興奮」と言い換えることには何の飛躍もない。また、ロキとバルドルのあいだに見られる兄弟間の敵意に満ちた関係についても、フロイトはオイディプスに関する論述を導入する直前で取り上げている。他方、バルドルと妻ナンナはオーディンと父とする兄妹である。兄妹婚は神話の常であり、この小説でもオーディンとナンナは互いに「お父様」「愛する娘」と呼び合っている。⁽³⁹⁾ むろん、それは義理の父娘関係を表すものではない。オーディンがあらゆる神々の父であるのだから、神々の婚姻は近親婚とならざるをえない。物語の底流にあるのは、近親相姦である。

『オーディンの慰め』はあたかも『夢解釈』を図式化した小説であるかのようだ。しかし、小説が発表されたのは『夢解釈』出版のほぼ二〇年前なのである。作者はフロイトの理論を知るよしもない。

③「革命の夢」と「オーディンの慰め」

確かに、この小説にはフロイトの「秘密」が潜んでいるにちがいない。すでに述べたとおり、『夢解釈』には「オーディンの慰め」という語句が現れる。それは「革命の夢」の分析においてである。この夢の末尾近くに次のような箇所がある。

男は自分が盲目か、あるいは少なくとも片目が見えないふりをしている。そして私は男に男性用の洩瓶をあてがう（私たちはその洩瓶を街で買わねばならなかった、あるいは買ったのだった）。すなわち、私は看護士で、彼が盲目なので、洩瓶を差し出さねばならないのである。⁽⁴⁰⁾

この箇所からフロイトは「七歳か八歳の頃のこと」を想起こす。フロイト家では就寝前に両親の寝室で用をたしてはならないということになっていた。ところが、あるときその禁を破ったのである。父は長男を叱責して「この坊主はろくなものにならんぞ」と言った。⁽⁴²⁾ このことは息子のプライドを手ひどく傷つけた。そして、この出来事を想起させるような場面が繰り返し夢に現れ、そのたびにフロイトは「かならず自分の業績や成功を数え上げている」という。⁽⁴³⁾

それは、あたかも「ほら、私はやっぱりひとかどのものになりましたよ」と言わんとするかのようである。⁽⁴⁴⁾

そして、放尿のせいで父に叱責された「幼年期の場面」は隻眼の男に尿瓶をあてがうという「夢の結末部の像の原材料となっている」のだという。

そこにおいては、もちろん役割の交代という復讐がなされている。年配の男は明らかに父だ。片目が見えないのは、父が一方の目の緑内障にかかっていることを意味する。かつては私が父の前で排尿したように、今は父が私の前で排尿するのである。⁽⁴⁵⁾

父の「緑内障」はコカイン麻酔を用いた手術で回復する。コカイン麻酔の開発にはフロイトもかかわっていたので、ここでも「業績や成

功を数え上げている」のである。そして、「片目が見えない」父、父への反感、その父への情愛―フロイトは看護士として父を介護する―こういった要素は、隻眼の「全父」オーディンとダーンの小説を指し示す。実際フロイトは「父が一方の目の緑内障にかかっていることを意味する」という文の末尾に注を付し、

別の解釈。彼は神々の父、オーディンと同じく隻眼である。――
オーディンの慰め。――お父さんにベッドを買ってあげるといふ幼年期の場面における慰め。⁽⁴⁶⁾

と書き記す。「ベッドを買ってあげる」という「慰め」も「革命の夢」にかかわる想い出で、すでにそれについても分析で取り上げられている。二歳頃に寝小便でベッドを濡らしたフロイトが、新しいベッドを買ってあげると言って父を慰めたというのである。⁽⁴⁷⁾ この注は引用した右の三行が全文で、ダーンの小説に触れてはおらず、作者の名前もない。それだけに「オーディンの慰め」への言及は「秘密」めいている。

この夢が「革命の夢」と名づけられたのは、それが「反抗的で、不敬で、お上を嘲弄する内容」であつたからだ。この夢を見たきっかけは、その前日に旅に出るフロイトが駅でオーストリア首相トゥーン伯爵を見かけたことだった。まさに国の權威を「嘲弄する」がゆえに「革命の夢」であるわけだが、その夢の内容は幼年期の「父への反逆」にまでさかのぼる。この夢の分析は、父との関係に関するフロイトの自己分析である。この夢が夢見られたのは、一八九八年七月二三日から二四日の夜のことであろうと推定されている。⁽⁴⁸⁾ 父の死去はその約二年前の一八九六年一〇月二三日のことだった。フロイトは『夢解釈』第

二版（一九〇九年）の序文で次のように書く。

この本は私にとつて、自己分析の一部であることが明らかになった。つまり、父の死への、すなわち、一人の男子の人生におけるもっとも重大な出来事、もっとも切実な喪失に対する反応であることが明らかにしたのである。⁽⁵⁰⁾

「父の死」への反応がこの大著の根底にあるのならば、「革命の夢」の分析はこの書の要^{かなめ}でもある。そして、『オーディンの慰め』はその要にかかわっていた。しかし、ジョーンズのフロイト伝でフロイトの自己分析が始まったとされるのは、父の死の翌年一八九七年七月のことだ。⁽⁵¹⁾ そのときから、フロイトはフリースに宛てて自己分析の手紙を書き綴るようになったのである。それに対して、ダーンの小説を読んだのは、マルタへの手紙が書かれた一八八二年六月一九日以前のことだ。そこには一〇数年の隔たりがある。自己分析がなされるとき、『オーディンの慰め』が意識的に想起された形跡はない。また、意識化されなかつたからこそ、夢の分析において、「オーディンの慰め」という言葉だけがふつと浮かび上がったのである。しかし、そうなると、小説を読むフロイトが登場人物のロキに明確な共感を感じていたことが、手紙で言われる「秘密」ではまずありえない。父へのアンビヴァレンツ、息子としてのオイディプスの状況が、恋人に手紙を書き送った時点で、「漏らす」ことのできる「秘密」として意識されていたとは想定しにくいからだ。また、フロイトは「オーディンの慰めを得んとして」[中略] 君とともに戦う」と書くのだが、そもそもロキ／オイディプスの状況は「慰め」とは結びつかない。両親へのオイディプス的な関係は、婚約者フロイト

にとつてはいまだ無意識的な心の「秘密」であつたのだろう。確かにこの小説が『夢解釈』の内容を、その一部であれ、先取りしている点には注目せねばならない。これについては後述する。しかし、フロイトが「秘密」として恋人に「漏ら」そうとする内容は別のところにありそうだ。

④ オーディンの慰め—ノルネンの教え

小説をさらに読み続けることにする。バルドルはロキの槍にうなじを刺し貫かれ、瀕死の状態でもフリッグの膝の上に横たわっている。不死であるはずの神が死なんとしているのである。刺さった槍を引き抜けば、バルドルはおそらく死ぬ。神が死ぬかもしれないという恐怖が神々をとらえる。オーディンは神の死が何を意味するのか、何が死にゆく息子にとつての慰めとなりうるのかを探りだそうとする。その真理を知るのは運命の三女神ノルネンである。瀕死の息子を母に任せ、オーディンはその謎を解明せんと三姉妹のもとへと下る。その住まいはヘル—冥界—の彼方にある。死者たちが影として住まうヘルはオーディンにとつても恐ろしい場所である。しかし、危険を顧みず、真理を求めて、ノルネンのもとへと下降を続ける。ようやく宇宙樹ユグドラシルの根元までたどり着くと、そこでは三人の女が糸を紡いでいる。三人の女は過去、現在、未来を司る。オーディンは女たちに問いかける。わしが探りたいのは、あつたこと、あること、これからなることだ。⁶²

オーディンは「叡智」を得んとするのだが、三姉妹はその見返りにオーディンの右目を求める。オーディンはそれに応じて右目を与え—この小説においては—そのときから隻眼となつたのである。一般に北欧神

話においては、オーディンは巨人の智者ミーミルが守る泉の水を飲んで、片目を失う。それによつてオーディンは叡智を得たのである。ダーンの小説にミーミルは登場しないが、知を求めて目を失うことは伝承と一致する。そして、そのことはふたたびオイディプスにつながる。オーディンが知ろうとするのは神々の今後の運命である。過去と現在を知ろうとするのは、未来を知らんとするがためであり、オーディンはそのために右目を失う。それに対して、オイディプスは過去を知ろうとする。オイディプスは言う。

俺は自分がどこから来たのかを知りたいのだ。⁶³

そしてその過去を—父を殺し、母を妻としたという過去を知つてしまったとき、オイディプスは自ら目を潰し、両目を失う。ここでも目は知の代償である。「革命の夢」に現れる片目の父は、隻眼となつた神オーディンである。それとともに、夢の中の父は「盲目」であつたとも言われており、全盲となつたオイディプスにもつながる。夢の中の父はまた息子としてのフロイト自身でもある。

ダーンの小説に戻ろう。片目を与えたオーディンに第一の女神ウルズが過去を、第二の女神ヴェルザンデイが現在を見せるが、オーディンはそれには満足しない。ついに、第三の女神スクルドが秘密を告げる。未来を司るスクルドは、「永遠に若く」あるかのように見える「素晴らしく美しい」女神である。⁶⁴ この女神は一言も発することなく、泉に未来を映すことによつて運命を告げる。オーディンはそこに女神の叡智を読み取る。あらゆる神は死ぬ。個体は衰え、死に、無と化す。神々が滅びるといふ北欧神話のラグナロク—神々の黄昏—のヴィジョンが

映し出されたのである。それは神々にとって絶望的な未来の運命であった。しかし、オーディンはそこに慰めを見いだす。あらゆる個体が消滅し、生命が絶滅しても、その死を超えた「永遠なるもの」があり続け、やがてまた生命が復活するのである。それが、オーディンに与えられた「英雄的で勇敢な慰め」であった。息子のもとに戻ったオーディンはうなじから槍を引き抜く。バルドルは笑みを浮かべて死ぬ。

運命の三女神ノルネンの名は、フロイトの一九一三年の論文「小箱選びのモティーフ」に現れる。論文のタイトルはシェークスピアの『ベニスの商人』の小箱選びから来ている。ポーシャを妻に求める男たちは金、銀、鉛の三つの小箱から正しい箱を一つ選ばねばならない。正しい箱は鉛の箱で、これを選んだバサーニオにポーシャが妻として与えられる。フロイトは三つの小箱を三人の女と解釈する。フロイトによれば、バサーニオが選んだのは三人目の女、金や銀のように光り輝かず、目立たず、沈黙する女だった。フロイトは三人の女から一人を選ぶというモティーフを神話や民話から採集する。フロイトが選んだのは、パリスの審判のアプロディテ、アプレイウスのプシケ（『黄金のロバ』）、灰かぶり、そして、シェークスピアの『リア王』のコーディアである。これらの女たちからフロイトは「沈黙」という要素を抽出する。三番目の女はいずれも沈黙する女であるという。リア王は三人の娘にいかにも自分を愛しているかを語らせようとする。しかし、三女コーディアリアは、

愛し、そして黙ってしよう。「第一幕、第一場」
と独白し、父の問いかけには黙して語ろうとしない。

フロイトは『夢解釈』の知見に基づいて、沈黙が表すのは死であるとし、したがって、沈黙する女は死を与える女、死の女神であると結論づける。第三の女がいずれも美しく、善良であるのは、死への恐怖ゆえの反動形成である。死すべき者としての自らの運命を自覚した人間は、それを認識すると同時に、その恐怖から逃れようと、死の女神を美しく飾り立てる。また、死は宿命としてもたらされ、自ら選びはしないという認識があるからこそ、逆に物語においては、第三の女を選ぶという設定がなされるのである。リア王は選ぶべき女を選ばなかった。そのせいで、国は乱れ、多くの者が死ぬ。そして、数々の悲劇が重なったのち、ついにリアには選ぶべきコーディアリアが死んだ女として突きつけられる。娘の遺骸を抱いて父リアは息絶える。沈黙する娘は父に死を与える。コーディアリアは、まさに死の女神であった。

フロイトは、こうした三人を一組とする女の原形はギリシア神話の三姉妹モイライであり、三番目の女はそのうちのアトロポス―生の糸を断ち切る女神―の末裔なのだという結論を導く。こうした考察のなかでフロイトは、モイライと「本質を同じくする」三女神として「ドイツ神話のノルネン」⁵⁴を挙げる。さらに死んだコーディアリアを抱いて舞台上に登場するリアについて、これを逆転させ、女が死んだ勇者を抱くという状況にすると、それは「私たちにとってなじみがあり、理解しうるものとなる」⁵⁵と述べ、次のように書く。

それは、ドイツ神話におけるヴァルキューレのように、戦場から死んだ勇者を運び去る死の女神なのである。⁵⁶
リア王という戦士が死んだ娘を抱いて現れる場面は、女性であるヴァ

ルキューレが戦死した勇者を抱いて戦場から立ち去るという状況の逆転だというのである。逆転という関係によって、『リア王』と北欧神話がつながる。そして、『オーディンの慰め』では登場人物がヴァルキューレの名を幾度も口にする。ノルネンとともにヴァルキューレを通じて、フロイトの論文と『オーディンの慰め』が結びつく。

「小箱選びのモティーフ」はたいへん説得力に富む論文である。ここではフロイトの書き手としての力、散文の魅力が遺憾なく発揮されている。これを読めば、フロイトのゲーテ賞受賞（一九三〇年）も当然のこととして納得できるだろう。それだけに、次の一点は気にかかる。それはアプロディテを「沈黙の女」の系譜に入れようとするところである。フロイトの言うように、ギリシアの伝説において、アプロディテはヘラやアテナと同じく、自らの美しさを主張してパリスに選ばれようとする。そのとき、アプロディテは沈黙してはいない。そこでフロイトはオッフエンバックのオペレッタ『美しきヘレナ』を引き合いに出す。そのリブレットでアプロディテについて次のように歌われる。

そして、第三の女が—そう、第三の女が

その傍らに立ち、

ずっと黙っていた。⁵⁸

こうした引用はフロイトの教養の幅の証でもある。しかし、一九世紀後半に創作された喜歌劇を根拠として、アプロディテを「沈黙の女」とすることには、少々無理があるように思える。同じ一九世紀の作品を引用するならば、むしろアプロディテはあきらめ、『オーディンの慰め』のノルネンに関する記述を引用したほうが説得力が増したのでは

ないか。オーディンはノルネンについてこう言う。

あったこと、あること、これからなることを知るのには、沈黙する姉妹だけなのだ。⁵⁹

ここでは三姉妹が「沈黙する」と言われるのだが、とりわけ三姉妹の第三の女、「素晴らしく美しい女」スクルドについては

彼女は一言も語らなかつた。⁶⁰

と言われている。そして、沈黙する女神はオーディンに愛息の死のヴィジョンを、さらにそれに続く、神々と巨人族、人間と世界の衰微と滅亡のヴィジョンを泉に映して見せるのである。フロイトは恋人に贈った小説のことを忘れてしまっていたのだろうか。

オーディンが泉のヴィジョンに見たのは「無」であつた。⁶¹ 個体の死のちに、死後の世界はなく、魂の永生も救済もない。ダーンの創作と「小箱選びのモティーフ」の論旨とは重なり合う。フロイトによれば、アトロ-posを祖とする第三の女は、人間に死の必然性と、その必然性と和解せよという叡智を示す。さらに、神話の女たちはまた男性との関わりにおいて、人生において姿を変える三様の母であるともいう。

それは、母その人、母を似姿として男が選ぶ愛人、そして最後に、その男をふたたび受け入れる母なる大地である。⁶²

個体には最終的に無が運命づけられる。死を宿命とする個体に「慰め」がありうるとすれば、「母なる大地」に受け入れられることだ。「母なる大地」において個体は解体し、他の生命の糧となる。個体を超えて生命が永続するという幻想が、個別の人間にとって、合理性を逸脱しない範囲での「慰め」でもあるだろう。フロイトは「小箱選びのモティー

フ」でこうした「慰め」に言及してはおらず、これは本稿の筆者による一つの解釈ではない。しかし、そうした解釈が成り立つとすれば、フロイトの「慰め」はまさにダーンの小説における「オーディンの慰め」に一致する。

ダーンの小説のオーディンはおののきながら泉に映る「無」を凝視する。そのまま長い時間が経ったのち、そこから自分たちとはまったく異なる生き物が湧き出してくるのが見える。やがてそれらは自分たちに似た姿が変わっていく。おそらく進化のことが言われているのだろう。そのように生命が持続するというのである。ノルネンの一人ウルズは言う。

すべての個々なるものが、個々のアース、神々と精霊も消え絶える。

個々の神もまた個々なるものであるからだ。〔中略〕

永遠なるはただ光と生命、喜ばしくも温かい動きのみ。⁶³

「個々なるもの」には「全なるもの」が対置される。オーディンはこの「全なるもの」を神々を超えた唯一の「神」と言い換える。徹底した無神論者であるフロイトがこうした読み替えに同意するはずはなかった。しかし、「秘密年代記」では、「オーディンの慰めを得んとして」「君とともに戦う」とまで明言しているのだから、やはりこの小説の死生観には共感するところはあったにちがいない。

父オーディンからノルネンの教えを受けたバルドルは、父にうなじの槍を引き抜くように言う。そして、死に際にこうつぶやく。

個々なるものは死ぬ。―永遠なるものが勝利し、生きる。⁶⁴

バルドルにとっても、ノルネンの教えが「慰め」だったのである。

四、フロイトとダーン

フロイトは「詩人と空想すること」（一九〇八年）のなかで文芸を成立させる条件について述べる。作家の創作の源となるのは、利己的で、反社会的で、倒錯的な空想であり、それは、あからさまに表現すれば、誰もが嫌悪を催すような性質をもつ。しかし、そのような嫌悪が生じるのは、その人々も許されざる欲望を自らの内に抑圧しているからだ。嫌悪は抑圧に起因する。文芸創作家の作品は抑圧の監視をかくぐり、受容者もそれと知らぬ間に、その抑圧された欲望を充足する。創作者は「変形と隠蔽」⁶⁵の術を駆使し、さらに、受容者に「純粹に形式的な、すなわち、美学的な快感」⁶⁶を与えることで、抑圧のメカニズムを籠絡する。文芸作品に熱中する受容者は、夢見る人がそうであるように、抑圧された欲望の充足を体験する。優れた文芸作品は、危険な欲望を秘めると同時に、それを美のヴェールで隠蔽するものであらねばならない。それが、フロイトの考える文芸を文芸たらしめる条件だった。

ダーンの『オーディンの慰め』はこうした条件を満たしていない。すでに述べたように、この小説の文体はあまりに仰々しく、とても美しいとは言えない。また、舞台を神話の世界とし、人間の欲望や葛藤を神々のドラマに移し替えるという「変形」がなされているとはいえ、あまりに露骨に父と息子の葛藤が表現されていて、かえって説得力をそいでいるように思える。また、オーディンに与えられる「慰め」にしても、すべてが消滅した「無」の暗闇から何ものかが芽生えつつあるのかもしれないという暗示的な「慰め」で終わるのなら、まだ何か

しらの余韻が残ったかもしれない。しかし、そこから新たな生命が湧きだす様が語られ、まして、生命の永遠性が神とまで呼ばれるまでになると、あまりに底が浅く、安直だという感想をもたざるをえなくなる。この作品がドイツ文学研究から抜け落ちているのは、それなりの理由があるというべきだろう。作者自身が「三流文芸作家」を自認しているのだから、本人もそれを不当な扱いだとして――泉下で――憤りに駆られることもないだろう。他方、「小箱選びのモチーフ」でフロイトがあからさまに「慰め」を示すことはなく、その読み取りは読者に委ねられている。そこにこのエッセイの迫力があり、書き手の力量を認めることができる。しかし、『オーデインの慰め』が若き日のフロイトの心を捉えたことは事実だ。やはり、表現形式を度外視して内容そのものに魅了されたと考えるほかない。フロイトも一九世紀の読者なのだから、今から見れば重苦しい文体も受け入れやすかったのかもしれない。何と言ってもダーンは当時の売れっ子の作家だったのである。

あらためて「秘密年代記」から引用する。

オーデインの慰めを得んとして、僕は不屈の反逆をしながらまず
は君と戦い、そののちに君とともに戦うつもりです。

「慰め」を得るために「戦う」というのは奇妙なことだ。「戦い」にかかわる「慰め」であれば、それはむしろ戦いののちの敗者に分け与えられるものだろう。しかし、すでに引用したモットーにもあるとおり、この小説における「慰め」は「英雄的で勇敢な慰め」なのである。

私の知るとおり、数少ない者のみが

慰められる――

オーデインの英雄的で勇敢な慰めによって

自然科学者であり、脳科学者であるフロイトにとって、死後の生、魂の永生などはない。まずマルタと戦わねばならないと書かれるのは、マルタが敬虔なユダヤ教徒の家に生まれ育った女性であったからだろう。自分と同じ立場にマルタを引き寄せるには、マルタとの棄教の戦いに勝利を収めねばならない。そののちに「君とともに戦う」というのは、オーデインのごとく、あらゆる危険を顧みず「真理」を求めて戦うということだろう。この年代記の文言が書かれる半年ほど前（八二年七月四日）、フロイトはマルタに「僕らは真理の僕（しもべ）です」（Bb.I, S160）と書き送っている。勝手に「僕ら」の一人にされてしまったマルタには迷惑だったかもしれない。しかし、フロイトにとって、自然科学を究めようとする戦いは、単に神経解剖学において新たな発見を希求する戦いにはとどまらず、それに基づいたある種の死生観を求める戦いでもあった。フロイトはそれを婚約者と共有しようとしていた。無神論者としては、個体の消滅の後にも種の生命は持続するというのが、死後についての唯一ありうる慰めであった。

個体の消滅と種の持続という構図は、本稿の冒頭で言及した「死の衝動」という観念に結びつく。『快原理の彼岸』において、生命体の自己保存衝動は「死の衝動」に読み替えられる。「死の衝動」は、生命体の自己保存のために他の個体を攻撃し、さらに、適切な時期にその生命自体を解体へ、死へと導く。他方、同じ生命体に宿る「生の衝動」は、その生命体を突き動かし――有性生殖であれば――他の個体との生殖による種の保存に向かわせる。ダーンの小説は一九二〇年の考察にまでつ

ながる。しかし、フロイトはそのことを意識してはいない。

青年期の読書体験は人の心に一般に深く根づく。まして、恋人への最初の贈り物に選んだ本のことをそう簡単に忘れられるものなのだろうか。「革命の夢」で片目の父が現れる場面の分析では、ゾラの『大地』やバニツアの『愛の公会議』といった文芸作品が取り上げられている。⁶⁷⁾夢のその場面から、これらの作品の内容が連想されたというのである。しかし、ダーンの小説には言及されず、ただ「オーディンの慰め」という文言が想起されるにとどまる。

これまで述べてきたとおり、『オーディンの慰め』には「革命の夢」に直結する要素が含まれている。隻眼の神、父なる神の死、息子との逆―これらの本質的な要素が夢と小説に共通する。ゾラやバニツアと並んで、ダーンが取り上げられないのは不自然である。もし、意識的にダーンを忌避しようとしたのなら、わざわざ脚注をつけて、そこに「オーディンの慰め」という文言を書きつけることはなかっただろう。むしろ、それを想い起こさせまいとする無意識的な力が、すなわち抑圧がそこに働いていたと考えてしかるべきだ。検閲をすり抜けて、「オーディンの慰め」という言葉だけが顕在化したのだが、それ以上の分析は抑圧されたのである。何が抑圧の要因であったのか、以下に一つの推測を述べる。

この夢の分析にかかわって、すでに引用したとおり、フロイトは夢の中で幼年期の失敗を想起するたびに「かならず自分の業績や成功を数え上げている」のだという。コカイン麻酔による眼科手術も、フロイトにとっては自分の「業績」であり、「成功」であった。しかし、現

実にそれはフロイトの「業績」とは言いがたいところがあった。コカインの麻酔への応用は友人の医学者に先を越され、公にフロイトの業績とは認められていなかったのである。フロイトの業績と言えるのは、コカイン研究において先鞭をつけ、医学への応用への道筋をつけたというところまでだった。『婚約書簡』でも、フロイトは一八八四年四月以降マルタに頻繁にコカイン研究について書き送っている。それほどこの研究に熱中していたのである。コカインの麻酔薬としての応用が自分の業績とならないことについては、フロイトも了解していた。しかし、むろん内心は穏やかではなかっただろう。そして、この夢の分析を書き記す『夢解釈』においてフロイトの大きな業績となるはずだったのは、オイディプス・コンプレックスの発見であった。コカイン研究で先を越されたように、その発見もまた、ダーンの小説によって先取りされかねないという想いがフロイトの無意識にあったのではないか。『オーディンの慰め』では、息子と父母とのオイディプス的な関係が、小説としては失敗と言わざるをえないほど、あからさまに表現されているのである。そのことをフロイトは知っていたからこそ、知らぬまにしようという力が働いたという推測が成り立つ。

ダーンについては、そもそものようにしてフロイトを先取りするような知見を得ることができたのか、さらにその点について追及すべきところではある。しかし、それに取りかかると本稿の範囲を大きく超えてしまう。フロイトと『オーディンの慰め』のかかわりについて一つの推測を述べるにとどめ、ここで本稿を閉じることにする。

なお、本研究は科研費5370036の助成を受けたものです。

注

- (1) フロイト『夢解釈(初版)(上)』、金関猛訳、二〇一二年、中央公論新社、二一六頁。
- (2) 同右。
- (3) 同右。
- (4) 同右。
- (5) *Bb1*, S. 90 本稿で以下に述べるように、この編者注の推測が的を射ているとは思えない。
- (6) フロイト『夢解釈(初版)(上)』、二七七頁。
- (7) フリッツ・マルティニ『ドイツ文学史―原初から現代まで―』、高木実、尾崎盛景、梶田光之、山田広明訳、三修社、一九七九年、三八五頁。
- (8) 藤本淳雄、岩村行雄、神品芳夫、高辻知義、石井不二雄、吉島茂『ドイツ文学史第二版』一九七七年、東京大学出版会、一九一頁。
- (9) 同右、二〇一頁。
- (10) Felix Dahn, *Erinnerungen*, Erstes Buch, Breitkopf und Härtel, Leipzig 1890, S.87.
- (11) *Ebd.*, S.88f.
- (12) ジョージ・L・モッセ『フェルキッシュ革命』、植村和秀、大川清文、城達也、野村耕一訳、柏書房、一九九八年、一〇二頁。
- (13) Felix Dahn, *Ein Kampf um Rom*, Anaconda, Köln 2014, S. 7.
- (14) *Ebd.*
- (15) *Ebd.*, S. 11.
- (16) ハンス＝ユルゲン・ゲールツ『ドイツ文学の歴史』、ワイマル友の会訳、朝日出版、一九七八年、四四二頁。
- (17) 同右。
- (18) 金関猛『ジークムント・フロイト／マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について(四)』、『岡山大学文学部紀要』第六八号、二〇一七年二月、四頁。
- (19) Felix Dahn, *Odin's Trost*, Breitkopf und Härtel, Leipzig 1880.
- (20) *Ebd.*, S. 1.
- (21) *Ebd.*, S. 93.
- (22) Felix Dahn, *Erinnerungen*, Viertes Buch, Breitkopf und Härtel, Leipzig 1895, S. 764. 同2頁でダーンは「学者として二流」だったと書いている。

- (23) フロイト『夢解釈(初版)(上)』、二四八頁。
- (24) 同右。
- (25) Felix Dahn, *Odin's Trost*, S. 19.
- (26) *Ebd.*, S. 8.
- (27) *Ebd.*, S. 36⁴³⁾
- (28) *Ebd.*, S. 337.
- (29) *Ebd.*
- (30) *Ebd.*, S.255, S. 376.
- (31) *Ebd.*, S. 370.
- (32) *Ebd.*, S. 377.
- (33) *Ebd.*, S. 378.
- (34) *Ebd.*
- (35) *Ebd.*, S. 376.
- (36) *Ebd.*, S. 251.
- (37) *Ebd.*, S. 268.
- (38) フロイト『夢解釈(初版)(上)』、三三七頁。
- (39) Felix Dahn, *Odin's Trost*, S.401.
- (40) フロイト『夢解釈(初版)(上)』、二六九頁。
- (41) 同右、二七六頁。
- (42) 同右。
- (43) 同右。
- (44) 同右。
- (45) 同右、二七六～七頁。
- (46) 同右、二七七頁。
- (47) 同右、二七六頁。
- (48) 同右、二七八頁。
- (49) William J. McGrath, *Freud's Discovery of Psychoanalysis*, Cornell University Press, Ithaca and London 1986, p. 267
- (50) Sigmund Freud, *Traumdeutung, G.W.*, Bd. 2/3, S. x
- (51) Ernest Jones, *Life and Work*, vol. 1, p. 356.

- ② Felix Dahn, *Odhin's Trost*, S. 403.
- ③ ホーメンステール 註 248。 *König Ödipus*, Tragödie von Sophokles, übersetzt und für die neuere Bühne eingerichtet von Hugo von Hofmannsthal, S. Fischer, Berlin 1920, S. 78.
- ④ Felix Dahn, *Odhin's Trost*, S. 404.
- ⑤ Sigmund Freud, *Das Motiv der Kästchenwahl*, *G. W.*, Bd. 10, S. 32.
- ⑥ Ebd., S. 36.
- ⑦ Ebd.
- ⑧ Ebd., S. 28.
- ⑨ Felix Dahn, *Odhin's Trost*, S. 390.
- ⑩ Ebd., S. 413.
- ⑪ Ebd., S. 436f.
- ⑫ Sigmund Freud, *Das Motiv der Kästchenwahl*, *G. W.*, Bd. 10, S. 37.
- ⑬ Felix Dahn, *Odhin's Trost*, S. 443.
- ⑭ Ebd., S. 450.
- ⑮ Sigmund Freud, *Der Dichter und das Phantasieren*, *G. W.*, Bd. 7, S. 223.
- ⑯ Ebd.
- ⑰ フロイト『夢解釈へ初版へ上』、二七七～八頁。